

鎌倉大仏周辺の発掘調査

～大仏造営手法と大仏殿の推定～



～はじめに～

露座の大仏様で名高い「鎌倉大仏」は、いつも訪れる人々を優しくいまなぎしで迎えてくれます。銅造の阿弥陀如来坐像で、国宝に指定されています。しかし、その安座されている地は大仏殿があったと記録されているにもかかわらず、文化財として十分な保護の網がかけられていません。そこで鎌倉市教育委員会では大仏殿の規模や大仏周辺の遺構を確認し、国指定史跡に指定して保存を図るため、平成12年度と13年度に文化庁と神奈川県教育委員会の補助と指導を受け発掘調査を実施しました。

その結果、大仏殿の位置を確認しその規模を確定するとともに、大仏様の鑄造過程の一端を明らかにするなど、大きな成果を得ることが出来ました。今後、この成果をもとに世界遺産登録推進事業の一環として、国宝である「鎌倉大仏」周辺のエリア保護に向けて取り組んでまいりたいと考えております。

最後になりましたが、2ヵ年にわたる調査の実施にあたり特段のご理解とご協力を賜りました宗教法人高德院様に心より御礼申し上げますとともに、調査に携わった関係者の皆様に深く感謝いたします。

【表紙写真】 高德院全景（手前が平成12年度調査区1区）

目次

1.鎌倉大仏	2
2.鎌倉大仏の姿（形式と作風）	3
3.調査でわかった鑄造の方法(像の制作方法の推定など)	5
4.大仏殿の位置と規模	9
5.大仏周辺の景観	12
鎌倉大仏殿略年表	13
英文概要	14

例言

◎本誌には平成12年度と13年度に実施した「鎌倉大仏」周辺の発掘調査報告書の概要を掲載しました。

◎編集は、鎌倉市教育委員会世界遺産登録推進担当が行いました。また、写真等は当委員会が保管しているものを使用しました。

1 鎌倉大仏

鎌倉大仏は正式には国宝銅造阿彌陀如来坐像といい、像高11.39m、重量約122 t、奈良東大寺の大仏（像高14.85m）に次いで、現存する坐像としてはわが国2番目の巨大なみほとけです。

東大寺の大仏は江戸時代に鑄直されたものですが、鎌倉の大仏は修理が加えられているものの、鎌倉時代に鑄造された中世の姿をそのまま残しています。

銅造大仏が鑄られ始めたのは、北条時頼（1227～1263）が5代執権であった建長4年（1252）で仏滅後1700年にあたる年とされています。鑄造にかかわった鑄物師は丹治久友が知られ、奈良金峯山寺蔵王堂の銅鐘に「鎌倉新大仏鑄物師丹治久友」と記されています。

大仏が造立された深沢は当時の鎌倉の外ですが、京をはじめ西国からの出入口にあたり、東国の都である鎌倉が西国の京のように同じ仏法の栄える都であることをアピールするためであったと推定されています。

その後、大仏殿がたびたび倒壊し大仏は修理を加えられたようです。



鎌倉大仏 The great statue of Buddha in Kamakura.

2 鎌倉大仏の姿 (形式と作風)

まず像の姿をみると、衣で両肩をおおう通肩^{つうげん}とし、腹の前で定印^{じやういん}を結んで結跏趺坐^{けつがふざ}しています。

通肩は平安時代までの仏像でしばしばみられますが、鎌倉時代ではあまりありません。奈良・東大寺大仏にならったものとも、当時流行していた善光寺式阿弥陀三尊の中尊像を踏まえたものともいわれています。



鎌倉大仏 The great statue of Buddha in Kamakura.

また定印の阿弥陀如来像も平安時代に多く、鎌倉時代には減少することから、やはり前の時代の形式を踏んだものと考えられています。なぜ定印にしたのかについては定説がありません。しかし横浜・證菩提寺像、静岡・北条寺像といった、北条氏により造立された阿弥陀如来像に定印を結ぶ例が多い点を重視し、大仏の制作に北条氏の積極的な関わりをみる意見が近年出され、注目されています。

作風については、肩幅が広く厚みのある体部と深く力強い衣文に、仏師運慶・快慶の流れをくむ慶派の作風が感じられます。一方で猫背気味の姿勢、体部に比べ大きな頭部などに、前の時代にみられない特色があります。これは中国・宋代の作品である横須賀・清雲寺観音菩薩坐像、京都・泉涌寺観音菩薩坐像などに通じる作風で、大仏もこうした中国の新しい様式の影響を受けたと考えられます。

以上の点から、鎌倉大仏は古い形式をもちながら、新しい作風を表現している仏像といえるでしょう。鎌倉では、京都と異なる大陸色の強い文化が花開きました。大仏は古いかたちをとどめながらも、そうした鎌倉独自の文化を象徴する存在として、造られたとみることもできると思います。



3 調査でわかった鑄造の方法 (像の制作方法の推定など)

平成12年度の発掘調査は、像が造立された位置や大仏殿の存在を明らかにするため、像を中心に正面・側面・背面等の5ヶ所で実施しました。

まず、像側面、現在の廻廊^{まわらう}の西外側に設定した調査区の3区の西隅では、現地表下約3m、標高11.3mのところまで平らに削られた岩盤を確認しました。像背面、廻廊北外側で調査した4区では海拔11mで水平に削られた地山^{じやま}が、また、像南側の参道石畳^{さんどういしだたみ}の西側に設定した1区などでは、ほぼ同じ高さに土や土丹^{どたん}を固めて構築した面がみつかりました。この事から大仏の周辺は大仏鑄造に先立ち、標高11.3mで整地作業が行われていたことがわかりました。

これら水平に整えられた地面の上部には、調査区1区から5区まで像に向かって高くなるように斜めに堆積する土層が確認されました。

なお、3区からは14世紀前半代のかわらけが多量に出土し、斜めに堆積する土層からは溶けた銅片やふいごの羽口^{はねぐち}、銅を溶かすための炉の破片など、鑄造にかかわる多くの資料が埋まっていました。

像の表面には横方向に12、3段の線が付いており、胎内にも同様に線が見られ、これらの横方向の線は下から数回に分けて鑄上げていった跡であると考えられています。



12年度1区 斜面堆積 2000 years No.1 district oblique accumulation.



12年度 発掘調査位置図
2000 years excavation investigation position figure.
(: 調査区位置)



12年度 4 区の発掘調査
2000 years No,4 district excavation investigation.



12年度 3 区 岩盤面
2000 years No,3 district rock shave side.

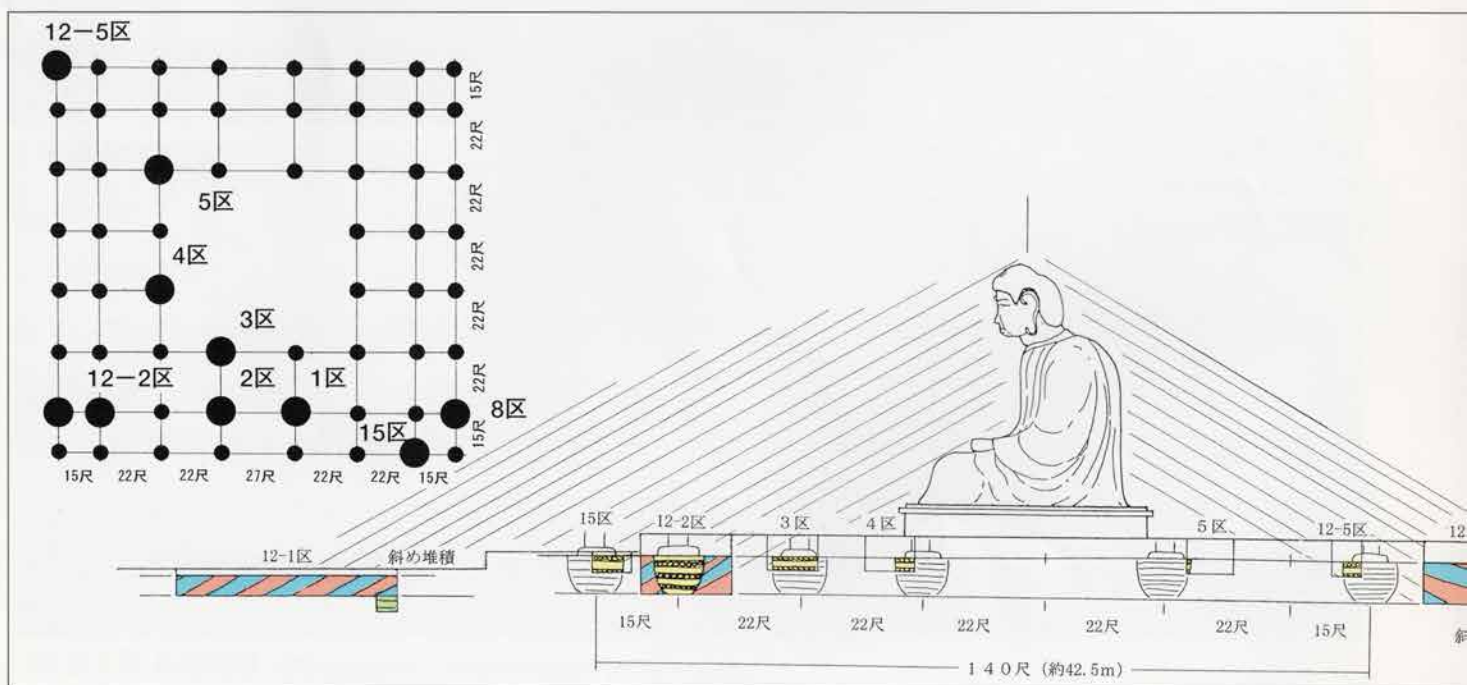
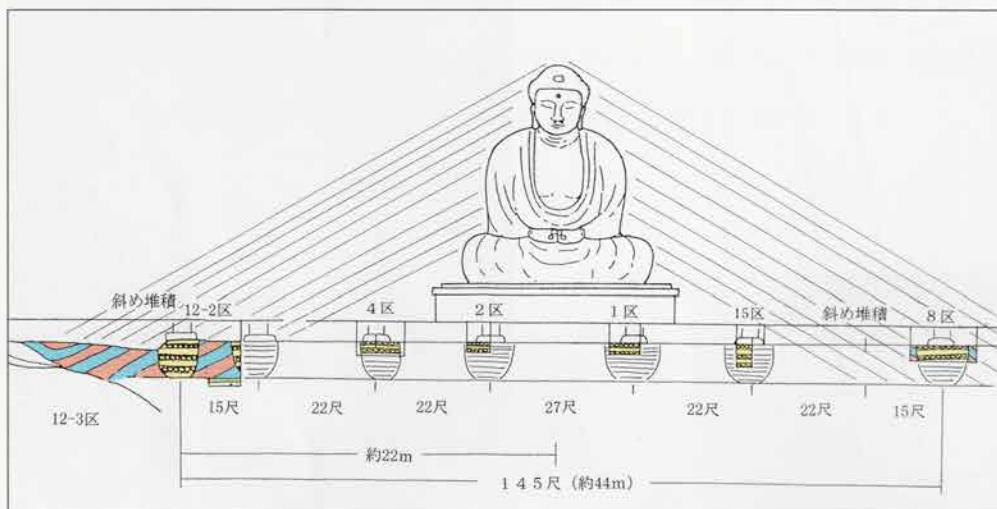
以上のことから、はじめて大仏を鑄造するにあたっては、次のような工程で作業がなされたことが想定されます。

まず、山すそやなだらかな斜面を平らに削り出し、そこに続く低地を埋めて水平な地面を造成します。そして像の基礎を周囲より高く築きます。その後、高さ100~150cm程の型を設置して周囲を土で埋め、その型を土で固定しながら鑄込むため作業場所を確保します。鑄込みを行ったのちその直上の部位に型を設置するため土を積み上げ、上へ上へとこの作業をくり返して鑄造されたと考えられます。



12年度 3区 かわらけ溜り断面

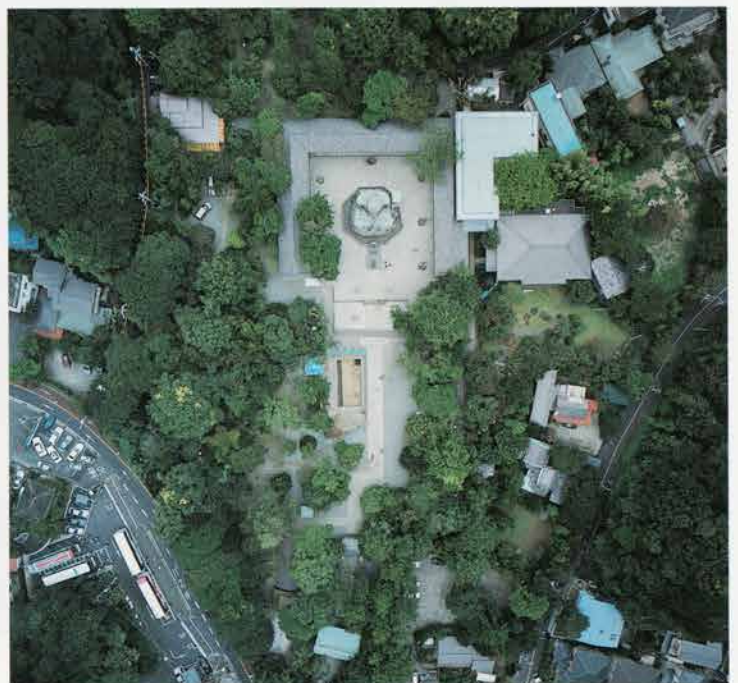
The section of 2000 years No.3 district unglazed eathenware concentration points.



大仏周辺根固め遺構模式図 Ceremony figure of the base mark around of the Buddha great statue.



12年度 4区 斜面堆積 2000 years No.4 district oblique accumulation soil layers.



高德院全景 A panorama of Koutokuin-temple.

4 大仏殿の位置と規模

大仏の鑄込みが終わったのち盛り土と型が取除かれ、像の周辺が元の地盤より2 m程高い、標高約13 mに整地されて、大仏殿が建てられたことがわかりました。

発掘された大仏殿の遺構は直径約3 m、深さ約2 mの穴の中を砂利と土丹を交互につき固めたもので、礎石の下を固めた「根固め」と考えられています。こうした「根固め」遺構は平成12・13年度の発掘調査で10箇所みつかっており、これから復元される大仏殿の規模は東西145尺（約44 m）、南北140尺（約42.5 m）です。

建物は五間四方の裳階付で、正面柱間は27尺（8.18 m）、その他の柱間は22尺（6.67 m）です。その外側に柱間15尺（4.55 m）で裳階がつくことが確認されています。建物の様式は明らかではありませんが、礎石の根固めの上面が平らであり、現在境内に残る礎石が上面・下面とも平らであることから、鎌倉時代に新たに導入された宋朝様式の建物であると推定されます。また、瓦がほとんど出土しないことから、瓦葺の建物でなく、檜皮葺、あるいは柿葺であると考えられます。これは同時期に建立された建長寺の建物のあり方と類似しており、建長寺と同じ禅宗様の建物であった可能性があります。

ところで、安土桃山～江戸時代初期の僧で醍醐寺の長であった義演（1558～1626）が書いた日記の慶長15年（1610）の項には、大仏は露坐で、その周りには四方に整然と大きな礎石が残っていたとあります。



12年度2区 大仏殿礎石下の根固め遺構

The mark of the base under the foundation stone at No.2 district in 2000 years.

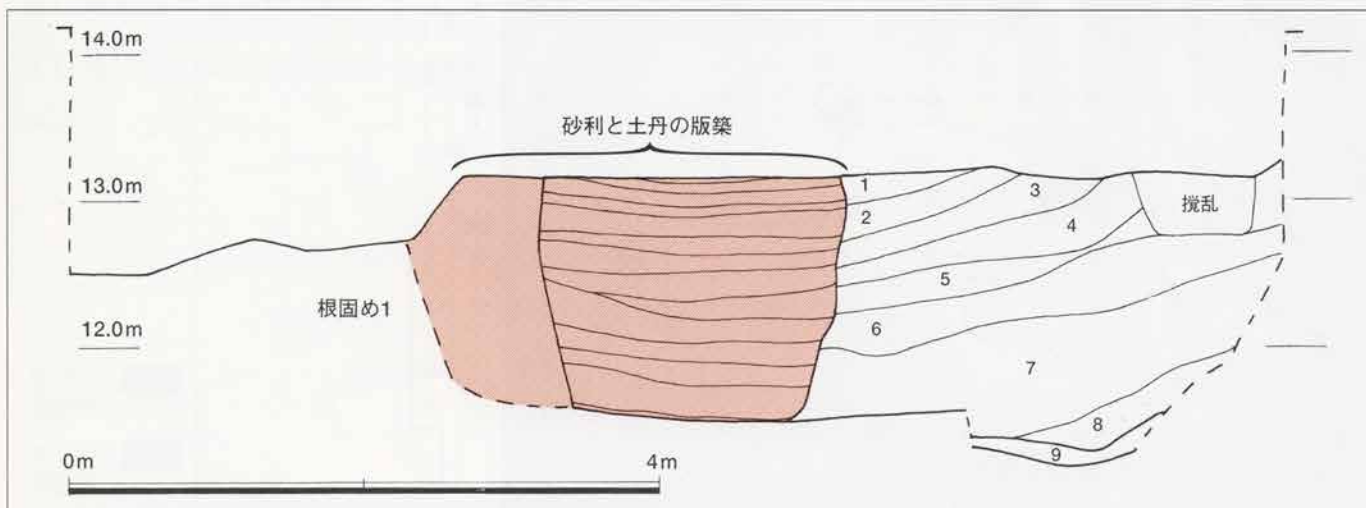
このほか、宝永元年（1704）の古文書には、地表に60個の礎石が東西25間（約45m）、南北21間（約38m）の範囲に配されていたことが書かれており、前面の裳階部分を除くと南北の距離はほぼ等しい数値が記されていますが、東西は一間程広く記されています。東西方向の礎石はこの時期すでに動かされていた可能性もありますが、発掘調査ではすべての根固めを確認したわけではありませんから、建物の復元にはもう少し時間がかかるかも知れません。

なお、明治20年代頃の古写真（13頁）には、像の前方1段下の平場に整然と据えられた平らな大石が見えます。この平場が今回調査した標高約13mのところにあるとすれば、古写真に写された大石は旧大仏殿の礎石であった可能性も考えられます。

明応7年（1498）に大地震と津波によって大仏殿が倒壊したという記録や、大仏が室町時代初期にすでに露坐であったことを書き残した紀行文のほかは、慶長12年（1607）に当地を訪れた切支丹管区長フランシスコ・パエズと同行者のロドリゲス神父の滞在記まで史料がありません。



12年度2区全景
大仏殿礎石下の根固め遺構
The panorama at No.2 district
in 2000 years.

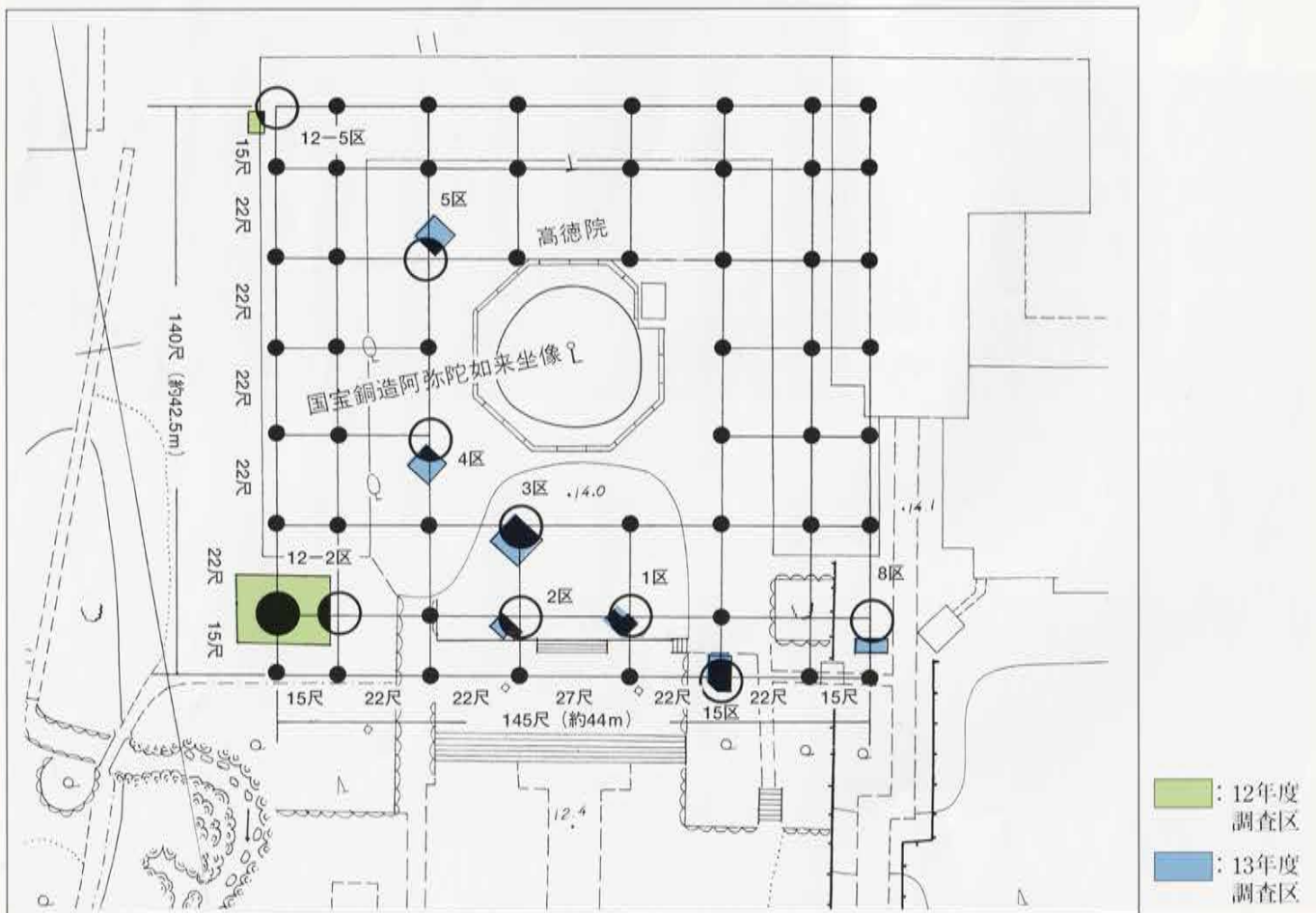


大仏殿礎石下根固め遺構の断面図
The cross section of the mark of the base under the foundation stone of Daibutu-den.



13年度3区で発見された
根固め遺構

The mark of the base that it
is discovered in 2000 years
at No.3 district.



大仏殿の規模（推定図） Daibutu-den's scale (estimated figure).

5 大仏周辺の景観

大仏周辺の調査では、大仏殿創建時の像周辺の状況がわかりました。像の前面は大谷戸・小谷戸・大仏坂方面の水系が合流する沼地や湿地帯でしたが、前面の築地の北側は現地表下約3mで大仏造営時の地面が確認され、13世紀末に埋め立てられて参道がつけられたことが地層や出土品から推定できます。東側の築地南東側（駐車場北側）は中世に行われた埋め立ての上に江戸時代の再興時にも土が盛られ、そこから像の修理で用いられたと考えられる鋳物のくずなどが出土しました。境内南東隅の山門東側にあたる場所は江戸時代になって湿地を埋めて現在の高さになり、大仏殿の西側にあたる部分では山が屋根の軒先近くまでせり出していた様子がうかがえます。

大仏殿北側の現境内域は、前述した大仏鑄造にかかわる斜め堆積のある埋め立て地でしたが、その北側は鎌倉の谷戸でよく見られる平坦な地形で、生活用具を含む遺物が出土し、境内の中心部とは異なる状況を示していました。

これらの事から、創建当時の大仏殿の境内は現在の高德院境内よりも小さかったと考えられ、大仏殿周辺の南・東側は広い沼や湿地帯があったと想定されます。とくに、大仏殿に付属するような建物の跡は見つかりませんでしたので、大仏殿のみが谷戸の入口に大きくそびえていたことが想像できるのではないのでしょうか。



13年度9区から大仏を望む
The great statue of Buddha is seen from No.9 district in 2001 years.



13年度9区 参道と思われる遺構
It is thought an approach at NO.9 district in 2001 years.

鎌倉大仏殿略年表

- ・ 建長 4 (1252) 8.17 僧浄光、深沢里で金銅八丈の釈迦如来像を鑄始める。(『吾妻鏡』)
- ・ 弘長 2 (1262) 頃 大仏殿完成か。
- ・ 文永元 (1264) 8. 2 「鎌倉新大仏鑄物師丹治、久友」奈良金峯山藏王堂の鐘を鑄る。(『集古十種』)
- ・ 弘安 7 (1284) この年、鎌倉極楽寺忍性が二階堂・大仏殿等の別当となる。(『性公大徳譜』等)
- ・ 嘉元 3 (1305) この年、大仏殿倒壊か。(『金沢文庫文書』「妙本書状」)
- ・ 元徳元 (1329) 12. 3 関東大仏造営料唐船が明春元へ発遣と決まる。(『金沢文庫文書』「金沢貞顕書状」)
- ・ 建武元 (1334) 8. 3 大風で大仏殿が倒れ、相模次郎時行らの軍兵500余人が圧死。(『太平記』)
- ・ 応安 2 (1369) 9. 3 大風で大仏殿が転倒した。(『太平記』『鎌倉大日記』等)
- ・ 文明18 (1486) 10.24 大仏は堂宇がなく露坐であったという。(『梅花無尽蔵』万里集九)
- ・ 明応 7 (1498) 8.25 大地震と津波で大仏殿が倒壊したという。(『異本塔寺八幡宮続長帳』等)
これ以降江戸時代の初頭まで、大仏殿の再建等に関する記録はない。
- ・ 慶長12 (1607) この年、切支丹の管区長フランシスコ・パエズがロドリゲス神父と鎌倉に滞在。
大仏が田圃の中に放棄されていたと日記に記す。(『日本切支丹宗門史』)
- ・ 慶長15 (1610) 4.19 醍醐寺の高僧義演が大仏参詣。像は露坐で、その周りには四方に整然と大きな礎石が残っていたと日記に記す。(『義演准后日記』)
- ・ 宝永元 (1704) 9. 7 旧大仏殿のものと思われる「柱礎石数」60個が、南北方向21間(約38m)、東西方向25間(約45m)で並んで遺存していたという。(『宝永元年訴状及び覚書』)
- ・ 享保20 (1735) 1 旧大仏殿のものと思われる径6尺ほどの礎石が南北方向21間、東西方向25間で並んでいたという。(『長谷村浄土宗高德院大仏修造勸進帳』)



明治20年代の鎌倉大仏 (古写真)
Kamakura great statue of Buddha
(an old photograph) in fee, the 20th
year of Meiji period.

The excavation investigation of the archeology at Kamakura-Daibutu area.

The Great statue of Buddha in Kamakura.

The Great statue of Buddha in Kamakura is a national treasure. It is the statue which Amitabha made of bronze is sitting on. It is called Kamakura-Daibutu at Japanese people. As for the height, weight is estimated at 122 tons by 11.39m. It is the image of Buddha of the 2nd size next to the great statue of Buddha (height 14.85m) of Toudaiji-temple at Nara in Japan. Though the great statue of Buddha of Toudaiji-temple was molded again in the Edo period, Kamakura's it is left under the condition that it is molded in the Kamakura period of the thing which a repair is added to. The year when a great statue of Buddha is molded is 1252 years. After Buddha died, this year believed a Buddhist to hit the 1700th year. Therefore, it can think that a huge image of Buddha was built in this year. Hisatomo Tanji is known, and the person who molded a great statue of Buddha is written in the bronze bell of Kinpusenji-temple in Nara with "Kamakura Daibusshi Tanji Hisatomo". The place where a great statue of Buddha is molded is land outside Kamakura in land to say as Fukazawa. There is an entrance area from the west country which should be represented Kyoto. A great statue of Buddha is estimated to be molded so that Kamakura where is the city of the east country may appeal that Buddhism is prosperous such as Kyoto of the west country and Nara to the people. As for that style, the style of school of popular Keiha in the Kamakura period is recognized. And, it is added, and there are characteristics like a big head in comparison with the body part, and the posture with a bit of the round shoulders and so on. Because there are a parallel case of works of China, Sung fee as for these, it can think that the great statue of Buddha in Kamakura took the new style of Chinese.

The way of the molding found out in the excavation investigation.

We dug some trenches in the surroundings of the great statue of Buddha, and examined what kind of stratum a great statue of Buddha was being built on. The rock board shaved flatly at about the incumbent surface of the earth last 3m, the place of the height above sea level 11.3m was confirmed on the west side of the great statue of Buddha as that result. The stratum of the nature shaved in the height above sea level 11m horizontally was detected even on the north side of the great statue of Buddha. And, an about it same height soiles and soft mud rocks strengthen developed land was discovered by No.1 district set up on the west side of the way paved with the stone on the figure south side. The circumference of the great statue of Buddha went ahead of great statue of Buddha molding from this thing, and it was found out that leveling of land work was done in about the height above sea level 11m. It went on the ground prepared horizontally from No.1 district of the investigation district to No.5 district for the statue, and a soil layer to accumulate obliquely to become high was discovered. The unglazed earthenware called Kawarake of the first half fee 14 centuries by No.3 district was excavated in quantity. Many materials which affected casting were buried in bronze settlement that it dissolved in a soil layer to accumulate obliquely, the piece of the air pipe of bellows and the smelter, and so on. Lines are added in the side direction on the surface of the statue. This can be thought to be the mark that it was divided into several times from the bottom and it was molded. Before molding a great statue of Buddha, it is estimated that work was done in the following process from the above thing. First, a gentle slope was carved flatly with the hem of the mountain, and then low land following that was filled up. Then, horizontal ground was developed. Next, a foundation of the statue was laid higher than a circumference. After that, a mold was installed on the foundation. Then, the surroundings of the mold were filled up with the soil, and it was fixed. The workshop place to do molding was secured. After the first-step molding was finished, the next mold was installed, and that neighborhood was filled up with the soil, and the second step was molded, and this was repeated, and molding was completed. After molding of the great statue of Buddha was finished, it got rid of soil and a mold.

The position of the building of the great statue of Buddha and the scale of the building.

After a statue was molded, soil was removed around it from the ground of the cause to a position to be high by about 2m. Then, leveling of land was done in the height of about the height above sea level 13m, and a building was built. This was called Daibutu-den. The hole of about a diameter 3m, about the depth 2m was discovered by the excavation investigation. Gravel and the mud rock lump of the soft quality were stuck alternately, and the inside of the hole was fortified. This was the base of the building, and a foundation stone was placed on this base. The base done like this was discovered 10 places. The scale of Daibutu-den is restored with the east and west 145 Shaku (about 44m), the north and south 140 Shaku (about 42.5m) from the position of the base. There was space between the pillar and the pillar by 5, and it was the building where a little roof was attached under the roof. This is the style called Goken-sihou Mokosi-tuki. The distance of the pillar in front of the building and the pillar is 8.18m (27 Shaku). There is 6.67m (22 Shaku) in the distance of other pillars and the pillar. The distance of the outermost pillar and the pillar is 4.55m (15 Shaku). This is the distance of the pillar of Mokosi which is an attached roof. The style of the building is estimated to be the building of the style of Sung dynasty in China which is introduced newly in the Kamakura period. The surface of the base under the foundation stone is flat, and all the foundation stones left in the precincts at present depend on being flat with the bottom of the surface, as well as for this reason. And, it can't think that a tile was covered in the roof from a tile's hardly being excavated. It is similar to the method with the building of Kentyouji-temple that it was built in the same time, and this has the possibility that it was the building of Zenshu-you-style which is the same as Kentyouji-temple.

The Landscape around the great statue of Buddha.

Conditions around the Daibutu-den at the first time which was built were found out in the excavation investigation around the great statue of Buddha. The front of the statue was the swampy place where the basin of three valleys joins, and a swamp. The ground when the great statue of Buddha was created on about the present surface of the earth last 3m was confirmed on the north side of Tsuiji (the wall of the soil with the roof) in front of the great statue of Buddha. This was filled up in the 13th century end, and an approach was built. Soil was heaped up besides the reclamation done in the medieval times in the southeastern side of Tsuiji on the east side in the Edo period as well. The trashes of the molding it can think to be used by the repair of the great statue of Buddha from there in the Edo period and so on was excavated. Land around the gate on the south side was a swamp until the Edo period. As for the west side of Daibutu-den, it was found out that a mountain protruded to about the eaves point of the roof. Present precincts on Daibutu-den north side were reclaimed land with the oblique accumulation concerned with the great statue of Buddha molding that it was stated before. We can guess that the precincts of Daibutu-den at the first time of it was built were smaller than its present temple precincts from these things. Because the mark of the building where it is attached to Daibutu-den wasn't found, we can imagine that only Daibutu-den rose in the entrance of the valley greatly in.



鎌倉大仏周辺の発掘調査

～大仏造営手法と大仏殿の推定～

発行日	平成14年11月1日
編集・発行	鎌倉市教育委員会
印刷	グランド印刷株式会社